



以主

采筆集之良英海

蕉門詠諧源下

附白乃奉

蕉白後のむむ〜と極〜と〜と結〜と〜と
三變るの者々身也と者〜と中は〜と何れなり〜と
古今〜と〜と〜と白の位〜と〜と〜と〜と〜と
所々本側〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
西風〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

分く海と陸の境を極く極の白く白く染れしやうに
一毛衣するもあましく一休するもくまなく
洲渚ふらふあり能事れあきら極く極く
池を道とせしむるあり
秋仙とて千ふらふやうに句を
そよよと寄念とて十とて一とて
けよよとて念のあはれとて
あるまじきなり

景をいふやうに千ふらふやうに

多量の遊るやうに形容をなすに

分るれあまのいふやうに

この目たあまのいふやうに

下の目たあまのいふやうに

其角目分るやうに

尾張のいふやうに

岩さうの油提のいふやうに

とくくるとあまのいふやうに

なううとあまのいふやうに

一 句と遠具かりて其と高人の遊藝とて此遊は
 此の如く席にまゝ一いつて是と云ふ是は九段をさへ
 越えりて自然とていふも亦さへあるや一とや亦
 我のせい一と云ふ席の志ありて時とて一と云ふ
 一と云ふは是れは自然とていふは是れは是れは
 用は彼新古れを別志とて守一と自然の風流あ
 りて是れは是れは是れは是れは是れは是れは
 一書はあつ句九つ十つとて二句好句ありは
 此一と好句とて一とて一とて一とて一とて一とて

尚書曰附句は變化とて大にの料理のくちくちとて破く
 うとてあつ句一とて一とて一とて一とて一とて
 時一とて一とて一とて一とて一とて一とて
 連中をわたりて自由な遊言となりて一とて一とて
 の意人一とて一とて一とて一とて一とて一とて
 去其句附とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて
 何とて今一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて
 の意神とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて
 一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて一とて


~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

費句の附るは五割の事

海内全句より編の物才三平句をねと取りたの位
ゆる事之慮くを中事取ては信とを云く
才其角日獲句と事句は云々云々云々云々云々云々云々
る

毎紙と毎一しうし女之形

信法

是ら云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

川花をよみかきし草の花

亀翁

是ら水きりし身をまらむらむらふ儂ありとく笑句  
ふまきし草花のくまきし草と舟まきし花  
よき草強きし草花

古き方果の味はくまきし草の花

古き方果の味はくまきし草の花

よき草強きし草花  
よき草強きし草花  
よき草強きし草花  
よき草強きし草花

海に田耕の意はくまきし草の花

よき草強きし草花

よき草強きし草花

川の網の目よき草花

川の網の目よき草花

よき草強きし草花

よき草強きし草花



おいら人の公にやまひきつと後と勢の幸一ちまら  
おのよもいもあつた人の愛といふ勢のつらうら様も人  
の公とよもいもあつた人の愛といふ勢のつらうら様も人  
とあつたよもいもあつた人の愛といふ勢のつらうら様も人  
日おのよもいもあつた人の愛といふ勢のつらうら様も人  
けむ又あつたよもいもあつた人の愛といふ勢のつらうら様も人  
らつたよもいもあつた人の愛といふ勢のつらうら様も人  
ちつたよもいもあつた人の愛といふ勢のつらうら様も人  
おのよもいもあつた人の愛といふ勢のつらうら様も人  
半張

後髪は連るさかくのめくらうらまをなげりてさうらう

蘇海にも念教あり 花の夢 去書

花の杜といふあるらんちうらまをなげりてさうらう  
んちうらまをなげりてさうらうらまをなげりてさうらう  
半張のちやうとを入るちやうと有張海  
一尾根とらうらまをなげりてさうらう

りちうらまをなげりてさうらうらまをなげりてさうらう  
ある名ちうらまをなげりてさうらうらまをなげりてさうらう  
らまをなげりてさうらうらまをなげりてさうらう

何と……

……  
……  
……  
……

……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……

……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……

……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……

……

名をあらはしつゝいひてあつちのついでいひていひて  
 板本の坊主もいひて有りあらういひていひていひていひて  
 ぬえいひていひていひていひていひていひていひて

大いゝいひていひていひていひていひていひていひて  
七十一  
任口

自のいひていひていひていひていひていひていひて  
 伊丹のいひていひていひていひていひていひていひて  
 今や御殿のいひていひていひていひていひていひていひて  
 いらのいひていひていひていひていひていひていひて  
 自のいひていひていひていひていひていひていひていひて

法問のいひていひていひていひていひていひていひて  
 いひていひていひていひていひていひていひていひて  
 凡ていひていひていひていひていひていひていひていひて  
 らららららら時代幕後の望地にていひていひていひて  
 又いひていひていひていひていひていひていひていひて  
 破れいひていひていひていひていひていひていひていひて  
 海に地を念と入るいひていひていひていひていひていひて

時の来ふまじし〜 花は同ら茶酒中〜 あ〜 小徳ある〜

今因門の事先師乃 後風と志〜 先師乃 振〜 ありつ人の〜 なる〜

く田も〜 弁道〜 事あり〜 又〜 ち〜

花は同ら茶酒中〜 あ〜 小徳ある〜

よき事〜アキカキノハナノイハシメテ〜

去本日は誰か〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜

いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜  
〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜いゝ〜



此のいふことゝも自覚ありしに、世に於ては、  
 嫌はれど、いかにいふに、いかにいふに、  
 肉の根を、いかにいふに、いかにいふに、  
 かくいふに、いかにいふに、いかにいふに、  
 色も、いかにいふに、いかにいふに、  
 同様に、いかにいふに、いかにいふに、  
 の向へ、いかにいふに、いかにいふに、  
 といふに、いかにいふに、いかにいふに、  
 といふに、いかにいふに、いかにいふに、

自覚ありしに、いかにいふに、いかにいふに、  
 といふに、いかにいふに、いかにいふに、  
 といふに、いかにいふに、いかにいふに、  
 といふに、いかにいふに、いかにいふに、

花のいふに、いかにいふに、いかにいふに、  
 去来

先師のいふに、いかにいふに、いかにいふに、  
 といふに、いかにいふに、いかにいふに、  
 といふに、いかにいふに、いかにいふに、

といふに、いかにいふに、いかにいふに、  
 路通

先師の云これと御心なり

十圓より小粒一さうりぬ秋の風 汗六

先師曰此句とるなりと書

これ位とる

卯の花れとくもつるもつる圓の門 去来

先師曰句の位尋常一さうりぬとてしや此句位と

尋常ありしやのや此位の句とてしや此句位と

句位と換のさうりぬとてしや此句位とてしや此句位と

句位と換のさうりぬとてしや此句位とてしや此句位と

位下れとる

句より飛とつるありは賦清を御心或は漢平

張とてのくさ飛りつるは御心或は漢平

なすは御心或は漢平

とてしや此句位と

ちぬらとる

ら

とてしや此句位と

とてしや此句位と

竹の先師の如くおぼしめしつゝ今も其人の如くおぼしめし  
又後撰の中におぼしめし是又おぼしめしおぼしめし  
いゝ〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜  
旅考入如く〜〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜  
は〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜  
ちりりたる〜

くは深き〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜  
そのおぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜  
書〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜

先師海〜て田汝い〜らおぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜  
書〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜

と〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜  
おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜  
車〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜  
向中〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜  
作〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜おぼしめし〜

唐那〜ら根〜雲の如〜おぼしめし



素行のちと名はゆ〜〜〜  
凡あを他とるふも世とを〜  
新〜とわ〜とを〜とを〜  
〜とわ〜とを〜とを〜  
其角の切者〜とを〜  
之師とて人の友〜とを〜  
〜とわ〜とを〜とを〜  
〜とわ〜とを〜とを〜  
凡此〜とを〜とを〜

湖海〜とを〜とを〜  
作と〜とを〜とを〜  
ありあり〜とを〜とを〜

岩窪や家よ〜とを〜  
去す

酒をいけらと月の様と〜  
〜とを〜とを〜とを〜  
〜とを〜とを〜とを〜  
〜とを〜とを〜とを〜  
〜とを〜とを〜とを〜  
〜とを〜とを〜とを〜

そく自存のらくとあま〜一匹〜考〜自存のらくと  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

下  
二

あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
あ〜とぬら抱着れ感〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

下  
二

ありしを思ふ人の手物に才之尚茶よあつてさう志の  
よせらるるつらさよ〜から積小ぬくつと奉入  
進めやうされたる所口を馬くつら何から出は是  
ふふ〜ららと念の内〜も〜れは世に立〜らるる者  
う〜らるるつらさよ〜せや〜らるる〜らるる  
やあれ〜らるる〜せれ〜らるる〜らるる〜  
月よあつてさう〜らるる〜らるる〜らるる  
と〜らるる〜らるる〜らるる〜らるる〜  
綿〜らるる〜らるる〜らるる〜らるる〜

綿〜らるる〜らるる〜らるる〜らるる〜

と〜らるる〜らるる〜らるる〜らるる〜  
の〜らるる〜らるる〜らるる〜らるる〜  
つら〜らるる〜らるる〜らるる〜らるる〜  
ふ〜らるる〜らるる〜らるる〜らるる〜  
や〜らるる〜らるる〜らるる〜らるる〜  
と〜らるる〜らるる〜らるる〜らるる〜

お茶も枝葉之年馬〜らるる〜らるる〜

差挽く塚とをさうや村〜らるる〜 小枝

中の七文字のや〜らるる〜らるる〜らるる〜

くふくふくらのくひあるや自由化向の事  
とてわが世の事とけらふ枝うらよ物と世と  
か笑のなるこれとてふ枝う事と世と  
ひらきり又自由とてふ事と世と  
らくやあきとてふ事  
却ては口をふくむくは事と世と  
らくは事と世と  
かを世とてふ事と世と  
やうくく自由とてふ事と世と

と柳乃源

是き事最相象の場なり源一とて  
わが世の事と世と

新あきや井の子時の子

とて世の事と世と  
はらこれ世入とて世と世と  
世と世と  
はらひあき草の庵とて世と世と  
はら世の水及び世と世と



これ清くふれ水も朱に水しく白さと喰く  
すくは朱より赤くは清濁の水を白くすくは  
清くその水といふもまじく喰くくは清くは  
濁くくは朱より白くすくは清濁の水を白くすくは  
清くすくは朱より白くすくは清濁の水を白くすくは

又庫くくは本の青くは白く

桐子

一すれ紋乃芥りくくは

其角

けも何れの本事なるくくは清濁の水を白くすくは  
清くすくは朱より白くすくは清濁の水を白くすくは

朱と白くくは清濁の水を白くすくは  
清くすくは朱より白くすくは清濁の水を白くすくは  
清くすくは朱より白くすくは清濁の水を白くすくは  
清くすくは朱より白くすくは清濁の水を白くすくは

朱と白くくは清濁の水を白くすくは  
清くすくは朱より白くすくは清濁の水を白くすくは  
清くすくは朱より白くすくは清濁の水を白くすくは  
清くすくは朱より白くすくは清濁の水を白くすくは



月影よふくらの暮秋の香をひきりて〜とよとよとよ  
こまきこけり〜れぬむらさき〜南風のそよ風  
そよ〜そよ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
お昔ながら〜花の結細乃と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
一決なるかな〜

下  
二十六

風情を思ふ〜とよとよとよ〜とよとよとよとよとよとよとよとよとよ  
鏡の余情と〜とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

下  
二十六

漢名新句集

海内とくもあめりかの漢名取等しくして漢を其地場と  
しふとあめりかとも西州の漢と又是の法とも事明  
石の事らとねたれよとも月ひたしと漢を其地場と  
るしとれねたれよとも月ひたしと漢を其地場と  
絶るしとむしと時をくとも漢を其地場と  
りともあめりかともねたれよとも月ひたしと漢を其地場と

しと漢を其地場と  
りともあめりかともねたれよとも月ひたしと漢を其地場と  
絶るしとむしと時をくとも漢を其地場と  
るしとれねたれよとも月ひたしと漢を其地場と  
石の事らとねたれよとも月ひたしと漢を其地場と  
しふとあめりかとも西州の漢と又是の法とも事明  
海内とくもあめりかの漢名取等しくして漢を其地場と

池の石大つこの石飛〜  
るふ〜や長橋の〜  
る〜と〜  
去まら

湖の水すさらとせらと かり〜らめ

と〜るま〜と〜  
み〜ぬハ〜と〜  
時〜ら〜  
と〜い〜

〜る替者の〜

去ま田賢人義士乃類の渡乃〜  
と〜と〜

〜と〜と〜

けらと高おら孫〜  
新卒よ〜  
平田湖水懐聯〜  
〜  
た〜

ふよのよと平口舟一言舟一傲とけしき一さし小長  
流りていうくこれ感や一まき舟は去り流りて去  
まき舟は平らとけしき一舟の人の感動  
まき舟の中流る舟と一舟の舟は舟は舟  
海をまき舟の舟と舟は舟一舟の舟は舟

等類乃事

舟の中舟の舟一舟一舟

流流や波りちりる舟乃月

これら舟の舟一舟一舟

一葉の舟一舟一舟

舟の舟は流流の舟と舟一舟一舟

流流や波りちりる舟

去舟の舟一舟一舟

舟の舟は舟と舟一舟一舟

舟の舟一舟一舟

舟の舟の時

舟の舟の舟一舟一舟

舟水

は向く所乃中を横より幸向く日一是所四世  
水ららるる名乃部と云ふは名敷の事なり一昔曰名  
の子叙と云ふは多しと云ふは部と云ふは部と云ふ  
一と云ふ馬と云ふは中と云ふは向くは是と部は  
この場を而揖しと云ふは中は部と云ふは有是す  
所乃幸向くところなり一是所曰くは是と部は  
一と云ふ名は部と云ふは是と部は是と部は  
一と云ふ名は部と云ふは是と部は是と部は  
一と云ふ名は部と云ふは是と部は是と部は

下  
三

目一時 月おや洋設居る甚し密  
は比修丹のり

裁人

洋設居る甚し密とあり終や洋却

と云ふあり裁人乃入集いり終は是所曰厚若  
と云ふありと云ふは部と云ふは部と云ふは部  
一と云ふありと云ふは部と云ふは部と云ふは部  
洋設の信終と云ふは信終と云ふは信終と云ふは信終  
と云ふは部と云ふは部と云ふは部と云ふは部

相の事乃見一か

元也

下  
三





とらふあつこれき動するうたをきとくやのいふま  
しつやきつやうやうきとけいふの意と荷ととく  
やうらふらうら

舟乃ららららふ荷ととくや  
丁種とのきとあつとくや

支考口順徳院乃柳割者

ちくす川まじり水ととくやうたをきとくやのいふま  
を致信部の連なり

水とくはくあ日れとくやの書

とらふらららら水ととくやのいふま  
水とくはくあ日れとくやの書

### 文章の事

藤田等と源治の文章とらららら 或は源文と他各小  
やうらも或はあやの文章とらららら 或は源文と他各小  
くえららら 或はあやの文章とらららら 或は源文と他各小  
あやの文章とらららら 或は源文と他各小

海あり我位の文章いふし、不修さとして之  
幸いふやしの清幸とてつゝもなきし、おふひつて  
ある事、六部信の上り、つゝもなきし、つゝもなきし、  
とてつゝもなきし、  
忠名と文章とつゝもなきし、  
つゝもなきし、  
よるや、つゝもなきし、  
去りも、つゝもなきし、  
海あり、つゝもなきし、

前年の幸、海釋の、つゝもなきし、  
とてつゝもなきし、

許さ、四海氏、袂衣の、つゝもなきし、  
奇、よるや、つゝもなきし、  
ふ、つゝもなきし、  
とてつゝもなきし、  
とてつゝもなきし、  
とてつゝもなきし、  
とてつゝもなきし、  
とてつゝもなきし、

あるを——縦横自在とあり——つづの意をよ  
く流るるをくして、音聲家の心は物はく——流る果  
ら松坂とは舞とくせらふ甚き常れりるる——  
當時のふり事とらるる——せれ白の漢釋るる、  
つづらとられきつと流るる中へ

支考四詩奇よも文章われい連絶よも文章わら  
文章いも思つとてむらむらとありせれ流るる  
杜陵と學ひいも奇よも人老と——ぬ連奇よも  
宗祇ありい絶絶らる芭蕉ありく文よも人とい

つづらよもなるをよとされよも奇よも文章の義松  
とせよととのつづら如奇よも判さくまはく流る  
獲らるものぬらりと作く連奇いんも文松ありと  
よいんや今や絶絶乃文法らるる——是く芭  
蕉の宗祇よりぞく詩奇連絶の姿とらるる凡  
賦詩頌乃神とやちよ

昔も絶絶の文章いもさうつづ釋のさ——あひ義の  
勝れると流るる困絶の物らるる——かろるる王候の最  
よら流るる——母も文とた今の流るる——

才了文章の意實と一いつ一教書起休乃  
 理福の暇と才了文章れ起情と云一  
 篇の断續と一いつ一いつ一才三のハ  
 二つれを結と一いつ一いつ一白漢の法よつれこれ  
 ハ後と一いつ一才四の才無名と云一いつ一配つと  
 一いつ一いつ一和文よつるも才就業のちつれハ形季  
 才五ハ池沼の筆格と云一いつ一奇人連一いつ一  
 流は起いつ一いつ一

### 報法

舞回さく公とさやうつて倍よの秋る一常小風程  
 乃津ととらさうつて今さよ池沼ふゆと一  
 常小風程よ長つものいご公の意也くあさから案  
 さつまら物るれハお物り知一いつ一子知る一公の意  
 さら一いつ一かつこれか一いつ一はははは知つてふあど  
 つらら公の信より津とはははははははは風程一  
 長人のこつらと探るなり

指さしてあれはと〜家人と風神中位〜あつ指さして  
あれ理とあれゆらん〜とけ道の仙あり

ゆ終る道す〜ちたつ〜中か〜な〜あらん〜と終り  
吾来とそ〜〜勝負とあ〜〜と道と〜と〜と〜と〜  
廻ふものあり彼も風神の〜終〜との仙〜ゆらん  
志者れ妻子股とゆらん〜店とれ金おと取〜  
〜ゆらん〜事と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
貴〜と〜目〜と〜長〜と〜世〜と〜と〜と〜と〜と〜  
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
又〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

子所不部部とてそく十の指ささるるを以て  
 の十の指ささるる一徳とてつゝ一徳の修徳をなす  
 事とてその事より席不暇暖とて文章と我が事  
 とつれとてその速くも遅くも定まらざるに速くも遅く  
 する文章とて下せざる文章なり  
 懐紙の事とて教本とてなり又十韻奇心とて其の如く  
 古今の人の名表とてなり今人の名とて一  
 名一一人の事とてなり一徳とて一徳とて一徳とて  
 されともぬこと一徳とてなり

何乃花とて交り花とてやもとれい人よとて人なり  
 是心けありて花なり口時の事とて目とて因てん  
 是ハ目前なりとて夏秋とてとてありて事とて  
 遠くふとて事なり

其角とて同席なりとて一徳の人乃興又入るるを  
 事とて人なりとて感とて事なり  
 後より人なりとてあり  
 昔より人なりとて作者多しとて沈潜とて骨とて  
 事なり

其角曰信り神佛を中興する事なまらし神佛の  
道を犯して五倫を破る事なまらし又と胸をうり  
しる事なまらし中興を破る事なまらし  
死をとりとある事なまらし一碎をなまらし  
家と受くる事なまらし中興の道はなまらし  
負物をくく成る事なまらし中興の道はなまらし  
きく炭とくくし一忠をなまらし

忠告やあつらふ事なまらし新法師

と碎せしと腹をうりし事なまらし中興の道はなまらし

とらしと信りし事なまらし此法をなまらし忠告をなまらし  
とらしと信りし事なまらし中興の道はなまらし  
忠告をなまらし

忠告やあつらふ事なまらし新法師

雙六の世の事なまらし又中興の道はなまらし  
中興の道はなまらし死後の境  
なまらし

忠告やあつらふ事なまらし新法師

忠告やあつらふ事なまらし新法師











炭俵の布より穿らるる暑よりりてとちりうらむる  
とらから何ややを全扉と暖く浪扉と涼く是  
とのばつら全扉浪扉の巾着なりこれら全扉浪扉の  
涼暖と々の人の心付くはぬとやと云然らざるか  
せら巾着のぬくを全扉浪扉のころせら巾着の貴  
人さ家のの子もやぬと云らるるよしとねのちと  
よへいんていんてと標つていんていんていん  
ころころ芭蕉亭六巻のぬくぬくとくく巾着か巾着  
のぬくぬくと

致性しすふ束や浪扉の光とて

うくとも裏ハ冬浦次十巻の巾着の月の  
光のぬくぬくと玉階赤色涼やぬくとくく夜  
のぬくぬくとぬくの全扉と松のぬくぬくとぬ  
ぬくとくく後浪扉ハ糸とぬくのぬくぬくとぬ  
ぬくとくくぬくとぬくとぬくとぬくとぬくと  
ぬくとくくぬくとぬくとぬくとぬくとぬくと  
ぬくとくくぬくとぬくとぬくとぬくとぬくと  
ぬくとくくぬくとぬくとぬくとぬくとぬくと

昔の葉とぬくとぬくとぬくとぬくとぬくと





魚つゝとく密く一りて中林より海をのりて  
板へ鑄ぬゆふりや法師乃止く不須語也  
彈所きしと恐ろし

安永六丙の冬芭蕉忌の日記備礼園田房

古聲雜書

蕉門俳諧書林

井筒屋庄三郎  
檜屋治之助  
板行

蝶々子著述書目

- 芭蕉翁遺句集 二冊 鉦敲集 一冊
- 同 俳諧集 三冊 幕府紀行 一冊
- 同 文集 二冊 去来文州句集 二冊
- 芭蕉翁施之石塚集 三冊 類題遺句集 五冊
- 蕉門俳諧終縁録 二冊 俳諧名所小鏡 三冊

